

「太平山麓九条の会」だより

事務局：須黒法律会計事務所 〒328-0027 栃木市今泉町 2-4-18 FAX0282-22-3757

電話連絡先0282-22-7079(増田)

HP：太平山麓九条の会で検索

Eメール oohirasanroku9jc@yahoo.co.jp



158号

2020年8月21日発行

戦後75年＝平和を守る大切さを再確認しよう！

敗戦から75年。焦土と化した東京も広島も近代都市に変貌しました。二度と戦争はしないという誓いのもとに制定された平和憲法によって、75年間何とか平和を保ってきました。しかし今、その憲法が変えられようとしています。武力で平和は守れません。もう一度戦争というものについて考え、平和を守るために行動していきましょう。今回の号では何人かの方に体験に基づいた原稿を寄せていただきました。

戦争の記憶

長嶋康子



(焼夷弾を落としたりしたB29)

「私の敗戦というは兄の戦死に
慟哭止まぬ母を見しこと」と詠んだ。

根津では根津神社が被弾して屋根が崩れた。その頃我が家の一帯が防火帯に指定され家が取り壊されたので栃木の母の実家を頼って疎開してきた。昭和二十年の春である。同時期に出征中の横浜の叔父の家が横浜大空襲で焼かれ、叔母たち一家が疎開してきたので母の実家は大変だったし、横浜の一家の生計はわが家が担ったので食糧難に苦しんだ。私の次兄はフィリピンで命を落とし、私は長じて短歌に親しみ

昭和十九年に東京本郷区の根津国民学校に入学。それ以前から空襲が激しかった。大人の男子は兵隊に取られて居なかったから、母たちはいつも在郷軍人に叱られながらバケツリレーで水を運び消火訓練をさせられた。一度は皆の前で焼夷弾を炸裂させて見せた。あれは炸裂すると大きめのビー玉ぐらいの火の玉が無数に飛び出し、正しく焼き払う爆弾なのだ。

学校は疎開者が多く教室は人数が少なかった。敵機編隊が房総半島に向かって来ると警戒警報が鳴り響き、児童はすぐに帰宅する。帰宅までに頭上に飛行機が来たら機銃掃射されぬように人家の軒下に隠れることと注意を受けて走って帰る。その頃は昼夜を分かたぬ空襲でみんな上野の山の中腹に穿たれた防空壕に逃げた。担いで行った莫産の上に家族が座ったが、ある日壕に入る前に目の下の落下傘製造工場が被弾して燃えるのを見てしまい、何処に逃げても死ぬ時は死ぬのだと悟り、それから震えながらも家に居た。

ソ連抑留の体験を描いた祖父の絵

高橋広野

白沢利男さん

1924年大平町に生まれる。高小卒業後農業に従事。1944年東武36部隊入営～独歩78大隊機関銃中隊。終戦後ソ連抑留。1949年7月帰国復員。農業に従事する傍ら、戦争体験を絵に描く。



2か月余の強制連行の旅の後、カザフ共和国、トルキスタン州、ハンギー村、ムリガリムサイ日本兵収容所に収容され、鉛鉱山で坑内採掘の作業に従事させられる

白沢さんは汽車の疲れと栄養失調で亡くなった黒崎さんの絵に「おーいよせ：黒崎君戦友は仕事のつかれと栄養失調で腹がへって塩水を飲みながら死んで行ってしまった」とコメントしている。



私が物心ついた頃から、箒を作る合間に絵を描き、戦友が訪ねてきては、その絵を囲んで何か語っていた光景を覚えている。私もその中に混ぜてもらったこともあるが、会話の内容は覚えていない。戦友と祖父の笑顔を思い出す。歌を歌いだす時もあった。きつとらかった時、歌などで励ましあった思い出話でもしていたのでしょうか。祖父の絵や抑留記から、峻烈な気候風土を生き抜き、8月9日ソ連が潜入、戦後も祖父たちを抑留した戦争の卑劣や生き抜いた戦友の心の深さが汲み取れた。

当時は怖くて聞けなかった祖父の話ですが、貴重な絵を残してくれたお陰で、学べるきっかけになり多くの方と出会えた。2018年平和展にてソ連抑留の語り部の話があることを知り、居てもたってもいられず、栃木市の職員の方に祖父の絵の話をしたところ、語り部である秋元武夫さんが祖父の絵の展示を承諾してくださった。

今年さくら市で開かれた「ソ連抑留展」で秋元武夫様ご自分の短歌とともに祖父の絵も展示してくださった。開催前に秋元様が亡くなられたことはとても残念です。

眠っていた祖父の絵に再び光が当たり、いろいろな方に見ただけのことに深い感慨をおぼえる。祖父が残した絵によって、戦争、抑留の実態、復員後病に悩まされた事実を後世にも伝えていけるよう、家宝として大切にしていきたいと思っている。

「時間がない」と戦争戦後の苦悩を体験した方は口をそろえて言います。戦後75年、戦後も抑留や飢え、孤児となり闘い苦しんだ人たちがいたこと、8月15日終戦を迎えてもなお戦っていた方々がいたことを風化させてはいけない、薄れさせてはいけない、美化させてはいけない、と思います。

まず、浮かぶ言葉は「ごめんなさい」。反抗期だったかもしれない。その頃の私の記憶。祖父との最後の会話は、いつものように喧嘩して「死んじゃえ」だった。「死ぬ」や、「くたばれ」なんて、日常的に友達とも使っていた当時の私。祖父はいつも怒った。「死ぬ」ことや「殺す」といった言葉について顔を赤くしながら怒鳴り怒った。

死について当時の私は、解らなかつた。祖父の話聞いても怖いという感覚はあったが、現実感がなかつた。

翌日、学校から帰宅すると祖父が危篤状態だと知らされた。病院にお世話になることがなかつた祖父の身体は肺気腫を患っており、昔(抑留中)の肺炎等の傷もあったようでほとんど機能していなかつたことがわかつた。戦後、呼吸器系の病気を患い命を落とす復員の方が多くいたことを後で知つた。「作業数分で鼻の中まで煤で黒くなつた。」との祖父の言葉を思い出した。マスクがあつたら、道具がそろつていたら違つたのかなと悔やむ。

祖父は多くの絵を残した。75歳で亡くなつたが、もっともっと描きたいこと伝えたいことがあつたのではないか。戦争、ソ連抑留さえ無ければきつともっと生きられたはずだと、青春時代5年を捧げた戦争に無念を感じてしまう。

2018年舞鶴引揚記念館30周年記念イベントに祖父の絵が飾られることになつた。

ナホトカは収容所満杯。個人の意思などは全く無頓着。再び奥地に逆走される。そして森林伐採。またしても絶望。



三泊四日の日本海は台風の余波で荒れていた。かくて二千の日本兵を乗せた高砂丸は、するすると舞鶴港は滑り込んだ。



わたしは今の時代と祖父の時代が重なることが多くなっていることに恐怖も感じます。

試験対策で学んできた歴史は、歴史ではないと感じます。どうか今一度歴史を知り学んでほしい。祖先が行ってきたことを知ること、考え感じることからでもいい。知ることから学びは強くなると私は感じました。平和であってほしい。そう、いつの時代も願

っていたことなのではないでしょうか？

さりとした知識しかなかった私ですが、2018年に京都舞鶴引揚記念館を訪れたり、秋元様のお話を聞くこと、祖父の足跡を追い知ること、平和への思いを強くしていくことが解りました。知ること、伝えていくことの大切さも教わりました。

本を読んで…

「焼けあとのちかい」

半藤一利 文・塚本やすし 絵

(大月書店)



今年の三月十日、東京大空襲から75年になった。三月十日から八月まで日本中の大きな都市が次々に焼き払われた。宇都宮中心街の大部分を焼け野原にした空襲は7月12日の夜中だった。私は東京都大森区馬込の高台の坂の途中に住んでいて、4月15日の夜空襲が始まるとはるか大森海岸のあたりが火の海になっっているのが見えた。今夜はうちかもしれないと思った。シュルシュルと焼夷弾が降る音、防空壕の入り口がパツとあかるくなる。壕から飛び出すと、家のすぐ下、お隣の農家の茅葺き屋根が火をふき、火の粉が雨のように降り注いだ。ふとんを水につけてかぶり、火の粉のカーテンをくぐり抜け、暗い方に逃げた。朝まで畑の縁で逃げてきた人たちと過ごした。目の前で家が燃え尽き崩れていく。厚い煙に覆われたすぐ上を低空でB29がゴーゴー通りすぎていく。この日は200機だったという。

編集者・作家の半藤一利さんは私と大学同期。半藤さんは東京の下町向島に住んでいた。米空軍ルメイ将軍は東京下町の木造密集家屋を焼き尽くす綿密な計画を立てた。三月十日、325機のB29が下町を襲い、4か所目標の火の手が上がり、その中を焼夷弾で完全に焼き尽くした。その結果、一夜で十万人が焼け死んだ(焼き殺した!)。中学二年生半藤一利少年もその中にいた。

「私はある時期まで東京大空襲で死ぬ思いをしたことを黙っていました。腕がもげてころがっていたりするのを見たりして、はじめはショックでした。でも、まだ15歳の子供だったのに、だんだん戦争で人が死ぬのが平気になってしまった。哀れみや悲しみの感情が失われ、非人間的になった。：それに、私は東京大空襲で川に落ちた時、助かるうとしてしがみついていた人を蹴飛ばした記憶があるんです。自分は助かったんですけども、いい思いはない。」だから話す気になれなかったと半藤さんは言う。私は住む場所の違いからそんな目には会っていない。

半藤さんはあることをきっかけに話すようになり、絵本「焼けあとのちかい」を書いた。いっしょに遊びまくったやんちゃんや下町つ子たちから絵本ははじまる。半藤さんは絵本の最後で言う。「絶対に日本は負けない」そんな「絶対」はないと焼け跡から教わった。自分が生きていくのも偶然。二度と「絶対」という言葉は使わない。しかし、あえて「絶対」という言葉を使ってどうしても伝えたい思いがある。

「戦争だけは絶対に はじめてはいけない」

(郡司利雄 記)



○スタンディング=16時から 9月9日(水)市役所前・19日(土)イオン・カワチ前

○スタッフ会議=9月11日(金)・9月25日(金)・10月9日(金) 13時30分から くらら

知っていますか＝栃木市の空は米軍機の訓練区域

日米地位協定に関心を持って！

栃木の空に米軍機が現れるようになったのは、4、5年前からだろうか。異常な爆音に空を見上げると、屋根すれすれに灰色の大きな機体が過ぎていく。一機だけでなく大抵3機でやってくる。初めは自衛隊機かと思ったのだが、友人が「米軍機で、横田から訓練のため飛んでくる」と教えてくれた。友人によると、最初は市役所に電話しても、「そんな事実は確認していない」との対応だったという。今では市もはっきり認識していて、苦情の対応はしてくれるという。抗議先は「自衛隊北関東防衛局（048-600-1804）」で、米軍へは直接的には抗議できないようだ。



栃木の空を米軍機が我が物顔にしかも低空で航行しているのに、まだその事実を知らない人が多い。話すと「自衛隊機でしょう。米軍機ではないよ」と一蹴されてしまうこともしばしばだ。マスコミであまり取り上げないためでもある。事故が起き、犠牲者が出なければ問題にならないというのだろうか。

日本の上空をこんなに勝手に米軍機が使用できる背景には「日米地位協定」の存在がある。米軍機が事故を起こしても日本の警察が立ち入れなかったり、米軍でコロナ感染が増えていても、その情報が日本側に流れてこないのも、「日米地位協定」があるからだ。

日本の空を米軍が自由に使えるようになってきているということを知ったのは、最近のことだ。東京の上空には「横田ラプコン」と呼ばれる米軍が管理する空域があり、日本の飛行機はそこを避けて飛べなければいけないという事実を人々が知ったのは、羽田発着の便を増やすため、政府が提示した飛行ルートからだ。

栃木市の空は米軍機C130の訓練空域の中にある。(図を参照) 頻繁に米軍機が飛行するのは訓練のためなのだ。「日米地位協定」でも低空飛行は許されないはずだが、そんなことはお構いなしという状態のようだ。

沖縄でコロナ感染が拡大しているが、その拡大の一端は米軍兵にあるという。米軍人は、日本側の検疫も関税も通ることなく、直接米軍基地から日本に入ることができるからだ。これも「日米地位協定」がかかわっているのだ。

私たちの生活に大きくかかわる「日米地位協定」にもっと私たちは関心を持ち、おかしいことがあれば声を上げなければならないと思う昨今である。

(I・T記)



C130機

(毎日新聞二〇一六年
二月二八日
東京朝刊)より
なぜ求めぬ

社説「横田空域通過で日米合意協定の改定を

首都の空を米軍が握り、民間旅客機が自由に飛べない状態が続いているのは、異常と言わざるを得ない。

東京の上空を覆う横田空域のことだ。1都8県に広がり、最高高度7000メートルに達する山脈状の巨大な空間である。(中略)

横田空域は、米軍基地周辺の管制業務について「米政府が行う」とした1975年の日米合同委員会の合意に基づいている。(中略)

問題なのは、日本の主権に関わる重要事項が、国会の関与もなく決められ、ルール化されていることだ。合同委員会は、外務省北米局長と在日米軍司令部副司令官が代表を務める官僚の枠組みに過ぎない。非公開で、議論の内容も公表されない。このため、米軍の管制権の位置付けの変遷も、どんな議論の結果なのかは不明だ。政府は、在日米軍には日本の国内法が適用されないと説明するが、国民の生活に影響を与えている問題が放置されていいわけがない。

参考